

RESEARCH REPORT 2

# 光秀の行動から、 改革のあり方を考える

教育学部教授

藤田達生

ふじたたつお

学術博士

専門分野は日本中世史・近世史

1958年生まれ



## 本能寺の変と現代

ここ数年間、私は本能寺の変——天正10年(1582)6月2日未明に発生した、明智光秀による織田信長暗殺事件——を研究テーマのひとつとしてきた。このクーデターの解明を通じて、最後の室町将軍・足利義昭の再評価をめざしたのである。

教科書では、元亀4年(1573)7月に義昭が信長に追放されて室町幕府が滅亡したことになる。しかしその後も義昭は現職の将軍だったし、備後国鞆(広島県福山市)に移った天正4年以降は、武田氏をはじめとする戦国大名や大坂(石山)本願寺に号令して信長包囲網を形成し、しばしば織田政権を窮地に追い込んだ。幕府が滅亡したと評価するから、そののち10年にも及ぶ内乱の本質がみえないのである。

「鞆幕府」は、毛利氏・長宗我部氏・島津氏などの西国大名に支えられ、北畠氏・六角氏・内藤氏などの大名衆や、奉公衆・奉行衆ばかりか側室・乳母・典医・同朋衆が結集していた。

右)  
津之郷御所跡  
(広島県福山市惣堂神社)  
左)  
惣堂神社の神体足利義昭木像



この幕府は、独自の経済基盤を整備し、西国政権とよぶべき本格的な実態をもつものであった。

本能寺の変とは、義昭が光秀らかつての京都周辺に残る幕臣に接近し、あらかじめ上杉氏ら反信長派の戦国大名達と連携して起こさせた政変、すなわち京都における幕府再興にかけた将軍のレジスタンスであった、とする仮説を提示したのである。

荒唐無稽に思われるかもしれないが、もちろん史料による裏づけをとっている。私達は、とかく歴史を結果から判断しがちである。勝者による歴史像が、現在もまかり通っていると言える。特に戦前は、信長が勤皇家として英雄視され、軍国主義化のために利用されたから、光秀は逆臣の代表となっていた。

いささか口幅つたいが、歴史学とは権力による史実の隠蔽・歪曲との闘いにほかならないと思う。また光秀のクーデター前後の苦悩に満ちた行動をみていると、歴史は合理性を尊ぶ理性と権威にすぎない情緒との相剋のなかから創造されることに思い至る。

現代を生きる私達には、光秀をアナクロな暴挙に与した人物と断罪することができるであろうか。彼のような伝統や文化を重んじる教養人の多くは、常識に呪縛され視野狭窄に陥りがちで、いつの時代にも改革者にはなれないのではなかろうか。

我々も、近代以来の国家・社会の隅々まで深く根付いた、伝統や文化という仮面をかぶった権威構造を打破しえていないと思う。現代の政治改革が困難を極めるのは、信長の時代と同様に、権威構造が利権を保障するシステムとして機能しており、いかなる分野も例外とすることなく厚く覆っているからである。

信長が中世の権威構造を克服すべく取り組んだ、既得権の打破と門閥にとらわれない人材登用は、現代においても国家的課題であって、実現しそうな気配がない。不幸なことに、改革を担うべきリーダー達の多くが、相変わらず派閥・学閥などの非合理的なコネによって選ばれているからである。

あえていうならば、戦後半世紀以上を経過しても、私達は権威構造を根底からは否定し

えず、民主主義を自らのものとしていない。このことへの無自覚は、近年における妄信的な歴史修正主義の台頭さえ許している。グローバル化が進行する現在、私達が直面する改革のありかたを考えるうえで、本能寺の変は貴重な教訓を語っているのである。

なお本能寺の変に関する拙著としては、『本能寺の変の群像—中世と近世の相剋—』（雄山閣出版）と『謎とき本能寺の変』（講談社現代新書）がある。ご一読いただければ、幸いである。

関係URL  
◎ 織豊期研究会  
<http://133.67.82.117/frame.html>  
◎ 中世都市研究会三重大会実行委員会  
<http://mietyusei.hp.infoseek.co.jp/index.html>

NHK「その時歴史が動いた」に出演中の筆者

